

出光佐三秘話

東京オリンピックの年、通勤途中の事故が原因で発症した第四領域症候群で、右手以外身体の自由を失った大石邦子さんは、当時22歳。絶望の淵で生きることを意味を見出していく日々は、自著「この生命ある限り」で描かれています。

これほどに彼女の生命を輝かせる大きなキッカケとなった、出光佐三さんの生き様についてです。

彼女はこう言います。「出光さんに傷をつけるような生き方だけはしてはいけないと、これまで生きて来て一番強く心に誓った方でした。」と。

ある日、出光興産の人事部長が店主室に呼び出されました。部屋に入るや出光さんから質問が飛びます。「君には子供が何人居る?」「はい、5人の子供がおります。」

「5人皆、秀才か?」「えっ、、お蔭様でそれぞれに勉学に励んでおりますが、、」

「5人も居れば多少出来の悪い者もいれば、病弱な者もおるだろう。そんな子供を親が家から追い出すかね?」「?・・・いえ、そのようなことは」

「会津の子供が事故に遭って会社を辞めさせられたと聞いた。知っているかね?」

「いえ、詳しくは存じておりません。」「すぐに行って様子を見て来なさい!」

程なくして、大石さんの病室に手紙が届けられました。

「必ず会いに行くから、待っていなさい。」そう出光さんが筆でしたためたものでした。

そして雪深い初市の日、パトカーに先導されて石油王はやって来たそうです。

「くーちゃん、来たよ!もう大丈夫だ。」実際には、会社から辞めさせられた訳ではなく、不治の病であることを知った大石さんの父親が「これ以上会社のご厄介になってはいけません。」と辞表を届けたらしいのですが、出光さんにしてみれば同じことだったのでしょう。以来、出光さんは大石さんとのやり取りを続け、当時の日本で唯一本格的なリハビリを受けられる熱海の療養所を世話しました。

そして5年間の歳月を経て車いすで動けるまでに回復されたのだそうです。

95歳で最後の息を引き取る直前にも大石さんに電話をかけ「なに、ここにお医者さんがいるから大丈夫だ。心配しなくていい。それよりくーちゃん、困ったことはないかね。」と尋ねられたと。

「まさか、すぐ亡くなるなんて思いもしなくて・・・その電話でも冗談を言って笑わせてくれたりして、そんな方でした。こういうことは、私だけじゃなかったんですよ。会社を辞めなければならなくなった社員が出た時も、奥さんや子供を路頭に迷わせてはいかん、と生活費と教育費を送り続け、お子さんを大学まで出し、出光に入社させたりとか。そんなことは人に言うてはいけないと。誰にも言わず陰徳を積まれる方でした。日田重太郎さんの影響でしょうね。店主室には、ご両親と鈴木大拙さんの写真に並んで日田さんのお写真も飾られていましたから。」

日田重太郎とは、出光さんが家庭教師で入っていた家の主人で、開業資金として8000円（現在の1億円前後に相当）を提供した方です。

「これは、君にやるのだから返さなくていい。事業の報告もしなくてよい。君が好きに使え。ただ、独立を貫徹すること。そうして兄弟仲良くやってくれ。」と言われたと出光さんは回想しています。出光さんの人生の原則がこの言葉に凝縮されています。出光佐三さんは、終戦の2日後、本社に集まった幹部社員に「借金が返せないから会社を解散するだと？馬鹿なことを考えるな。出光の社員は一人として馘首（かくしゅ）してはならん。」と言い放ちました。そして日本に居た200人の社員に訓示します。

「愚痴をやめよ。世界無比の日本の三千年の歴史を見直せ。そして今から建設に掛かれ。」商売で使える石油などない時代です。国外から引き揚げて来る800人の雇用を守る為に、ある者は魚を売り、ある者は自転車修理をして凌ぎました。

出光さんは、所有していた美術品を売り払い、還って来た社員達の住居を用意してやっていたそうです。「住む場所がないというのは辛い。家族に哀しい思いをさせてはならん。」日田氏と約束した大家族主義を貫徹しました。共に働く社員は、他人ではない、ということです。

変えられるものは、自分たちの明日。

その覚悟が必要ではないでしょうか。

香川 湧慈 拝